

友達とのトラブルで登校できなくなった生徒への対応事例

キーワード： リソース ゴールの設定 例外探し

この事例解説では、「ゴール設定」や「例外探し」等、解決志向の相談活動に焦点をあててまとめました。

実践の概要

「先生、相談があるんです」とMはいつも副担任のY先生や養護教諭のE先生のところに相談に来る。部活の顧問から自分だけ叱られて頭にきたこと、苦手な数学の先生からもっと勉強するように言われて落ち込んだこと、次から次へとやってくる。

先生が話を聞いてあげると「ありがとうございました」と明るく挨拶をして帰っていき、何日もしないうちにまた相談にくるという状況である。

2年生の秋、新人戦を1ヵ月後に控えた頃、Mは同じ学級で同じ部活のKとのけんかがきっかけで休み始めた。

友達だと思っていたKに「いちいち先生に相談して、そんな暇があったら、がっちり練習してよ。それでなくても下手なんだから。先生に相談してもどうにもならないわよ。自分の問題なんだから」と言われたことによる。

その頃から、Mは学級や部員の中で「何でも先生に言う子」というレッテルを貼られ、避けられるようになってしまった。

対応の概要

1 チーム会議を行い、援助方針を立てる

いつも元気なMがはっきりした理由もなく学校に来なくなってしまった。担任はY先生と連携し、学年主任、顧問、養護教諭の5人でチーム会議を行い、対応することにした。

以前に部活の後輩とのトラブルの際に、Y先生が相談にのり、うまくいったケースがあったので、今回もY先生にMの話聞いてもらうことにした。

2 Mの思いを理解する

Y先生は「登校」を前面に出さずに電話で困っていることについて聞いてみた。Mは「いちいち先生に相談して・・・」とKに言われたことで深く傷ついている様子で「もう誰にも

相談できない」と繰り返していた。

「先生に相談する」ということが「何でも先生に言う」になってしまい、これまでとってきた行動だけではなく、自分自身をも否定されたと思ひ込み、自己肯定感が下がってしまったと思われる。このような中で、「相談できない」という本人の思ひ込みが大きくなり、前に進めなくなってしまった。

3 Mのリソースを再び生かす

Mはこれまで自分が直面している課題に対して、「相談する」ことを通して相手からヒントをもらい、自ら解決してきている。

そこで、このようなMのリソースを再び生かすために「今、相談できている」ことに気づかせ、元気づけることにした。

Y先生：「どうしてる？最近、相談に来ないから心配していたよ」

M：「もう誰にも相談できなくなったんです」

Y先生：「誰にも相談できなくなったの？」

M：「そうなんです。もう誰にも相談できないんです」

Y先生：「誰って、誰に相談できなくなったの？」

M：「先生とか・・・友達とか」

Y先生：「うーん、じゃあ相談できる人って誰？」

M：「誰もいない。（間があって）」

あっ、今、Y先生と話している・・・」

Y先生：「そうそう、相談できているじゃない！」

以前に部活の後輩が「Mのやり方についていけない」と言い、部活をさぼるようになった時、Mは顧問に相談することで、“後輩と話し合いをもつこと”を決め、自力解決してきた。このことを思い出させながら、Mにとっては「相談する」ことは問題を解決したいという前向きな気持ちの表れであり、それができるMの素晴らしさを大いに評価した。

次第にMの声は明るくなっていった。



4 ゴールを設定する

- Y先生 : 「今、解決したいことはどんなこと？」
M : 「数学の先生も頭にくるし・・・、顧問は私ばかり叱るし・・・、Kも私のこと下手くそだって言うし・・・何もみんなの前で大声で言わなくてもいいのに」
Y先生 : 「今の問題が全部、解決したらどんな感じになっている？」
M : 「すっきり、最高！いい感じになっていると思う」
Y先生 : 「そっかあ・・・いいねえ。朝起きて、寝るまでどんな1日を過ごしていると思う？」
M : 「朝、6時に起きて、7時30分から朝練習をして、そのあと授業に出て、毎日部活に行き、7時に家に帰って夕食を食べて、宿題をして、お風呂に入って11時には寝るって感じかなあ」
Y先生 : 「毎日、部活に行ってるんだね。問題が全て解決したとき、Kはどう変わっている？」
M : 「怒らずニコニコしていると思う」
Y先生 : 「そうねえ。ニコニコしてKは何をしているの？」
M : 「一緒に大会に出て、ゲームが終わって握手している」
Y先生 : 「その日の天気はどう？」
M : 「暑くて汗が出ている」
Y先生 : 「暑くても大丈夫？」
M : 「暑い中、毎日、厳しい練習に耐えたから大丈夫！」
Y先生 : 「毎日、練習したんだ。すごい！すごい！」

電話相談の中でMは「大会に出場したい。Kと仲直りがしたい」という思いが強いことがわかり、ゴール設定を「Kと一緒に大会出場」とした。

ゴール設定ができたところで、「保健室で相談の続きをしよう」ともちかけた。

5 例外探しをする

Mが登校ができるようにするために、母親の力を借り、昨年うまくいったときのことを再現することにした。

- 担任 : 「昨年、Mさんが学校を休んだとき、1週間ぐらいで登校できましたよね。あのときはどんなことがあって登校できたんでしょうね」
母 : 「あのときは一緒に食事づくりをしたり、テレビを見たりして、できるだけ一緒にいる時間を作りました。学校に行けた日は、前日、Y先生から電話があり、本人が「学校に行きづらい」と言ったらY先生が「じゃあ、家から保健室までポーンと運んでもらおうか」とおっしゃったというので、その言葉どおりにしてみようということになり、次の日、車で

娘を連れていきました」

担任 : 「そうでしたね。その時と同じことをもう1度やってみましょう。どうですか？」

昨年と同じことをしてもらったところ、Mは母親に送られて登校することができた。玄関で待っていたY先生と養護教諭のE先生に元気な声で挨拶し、保健室に入ることができた。

その後、Y先生と相談を続け、Kと話し合いをもつことができ、解決の方向に向かっていった。

実践のポイント

1 Mのリソースを有効活用したこと

Mが「先生に何でも言う子」というレッテルを貼られ集団から孤立したことで「もう、相談しない方がいい」、「相談させない方がいい」と理解するのではなく、「相談すること」をMのリソースと位置づけ、それを最大限利用して、解決の糸口としたことが大事な視点である。

Y先生は、自己肯定感が下がっているMに対して、「相談できる」前向きな姿を大いに評価し、自信をもたせた。

また、「誰にも相談できない」と思い込んでいるMに、「ほら、ちゃんと私と相談してんじゃない」という機転の利いた言葉をかけることで、かたくなになっていた本人の心を和らげることができた。

2 ゴールを設定したこと

「何が問題でこうなったのか」という原因探しではなく、「今の問題が全部解決したらどんな感じになっている？」という解決志向の相談を進め、「是非、そうなりたい」と思えるような意欲の源泉となるゴールを設定した。このことで、Mは前向きにこの問題を考えることができ、元気になっていったと思われる。

3 例外探しをしたこと

昨年、Mが学校を休んでいた時、朝にどうしようかと悩む時間を与えずポーンと母親に保健室に連れてきてもらうという例外（不登校を続けている中で登校したこと）を再現したことが有効であった。

例外的にうまくいったことを増やしていくことで例外が例外でなくなり、解決した状態になるわけである。